ふじみ野市女性情報誌

燦さん No.18

●女と男が共に生きる社会をめざして

「燦」とは……

「燦」=「さん」という言葉には、いろいろな意味が込められています。
自ら光を発してかがやく太陽、子どもを産みはぐくむ母親、産業に携わるひとびと。
人が人として充実した生活を送るために、いま、さまざまな動きがあります。
そのことをより多くの人たちといっしょに考えるために、この情報誌をお届けします。

※より多くのみなさんにご覧いただけるよう、「市報ふじみ野」に掲載します。

企画・編集／公募編集委員、市民相談・人権推進室（TEL 262・9001）

働く男のWLB（多様化する生き方時代のワークライフバランス）

「ワーク・ライフ・バランス」という言葉を耳にしたことはありますか？聞いたことはあるけれど、じっくり考えたことはないという人も多いかもしれません。『仕事と生活の調和』と訳され、仕事と仕事以外の生活が、自らが希望するバランスで展開できる状態のことです。このバランスも人によってさまざまで、年齢や置かれている環境によって随分変わってくるものだと思います。

今回は、働き盛りで子育て真っ最中の市内在住、福澤徹三さんに育児や仕事についてお話を伺いました。

夫婦で分担！

福澤さんは、フルタイム勤務の奥さんと2歳と小学2年生のお子さんの4人家族。2歳のお子さんの送り迎えを夫婦で分担しています。福澤さんは規定の勤務時間を朝1時間遅くし、保育園の送りを担当。仕事が休みの月曜には迎えにも行っています。一方奥さんは、朝1時間遅く、夕方1時間早く退社する2時間の時短勤務を利用し、保育園の迎えを担当。食事の準備は奥さんがしますが、食器洗いや洗濯は福澤さんがしています。

また保育園からの急な呼び出しに対応できるよう、お互いの仕事のスケジュールを毎日確認し合い、どちらかが対応できるよう工夫しているとのこと。しかしながら調整がつかず、夜中にけんかになることもしばしばあるようです。休日は奥さんが2歳のお子さんの面倒を見ている間、福澤さんは小学2年生のお子さんと2年前から始めた「親子空手教室」に参加して共有の時間を過ごすよう休日も分担をしています。

周囲の理解を得るための工夫が大事！

職場では中堅ということもあり責任のある仕事を任されることの多い福澤さん。「自分が休んでいる間、代わりにやってくれる人がいる。20年前であれば、誰もが家族がいて…という同じような生活スタイルを想像できたかもしれないが、いろいろな家族像や家族を持たない人などさまざまな価値観がある社会においては、気持ちの部分での共有は難しい」と福澤さん。だからこそ、「休んでいる割にはきちんとやっているな」と信頼してもらうために、全力で仕事に取り組むことが大事であり、それが周囲の協力を得るために大切なことではないかと話してくれました。

育児の大変さはやってみないと分からない。言葉で伝えることも難しい。大変さを分かってもらうのが当たり前という態度でもいけない。子育て支援や意識の広がりも見せる中、現実を現している言葉だと感じました。

逃げ場のない仕事と育児

仕事と育児を両立するに当たり大事なことは何ですか？とお尋ねしたところ、「両立というと文武両道みたいなイメージがあるけれど、そうではなくて、育児も仕事も逃げ場がない。手のかかる期間という時間はいつまでも続かないから、その期間をしのいでやっていく、今という時間を楽しみながらやることが大切。そして、1日に1回は家族全員が一つのことで笑うことができるようにしていきたい、子どもにとっては4人全員でいることが大切なことで、それがあれば一緒の時間が短くても自分の親は仕事をしている親だからと理解してくれると思う」と答えてくれました。

子どもを支えてくれる環境に感謝して

福澤さんは保育園の入園式で園長先生が言った「保育園に預けている間は安心して仕事をしてください」という言葉が印象に残っていると言います。「安心して子どもの面倒を見てくれる仕組みがなければ今のようなライフスタイルも続けられない、感謝の気持ちを忘れないでいきたい」と話してくれました。

本人だけでなく「地域社会の支え」もとても大切であること、さまざまな生き方がある社会だからこそ自分に合った制度を利用し、自分なりのワークライフバランスを作っていくことが大切なのではないかと感じました。

編集後記

初めての取材に戸惑いもありましたが、気さくにお話しいただいた福澤さん、市のスタッフさんに感謝いたします。皆さまがワークライフバランスを考えるきっかけになれば幸いです。

◉企画・編集
ふじみ野市女性情報誌「燦」編集委員
落合文子

基礎から学ぶ男の料理教室に参加して

台所からの一歩

「地域から教室へ、教室から台所へ…そして台所から男女共同参画の理解を一歩一歩進めたいと思っております」料理教室の締めを飾った言葉だ。

男女共同参画をすすめる市民の会が開いた『基礎から学ぶ男の料理教室』にはさまざまな層の男性が集まった。定年を迎えた人、聴覚に障がいのある人、休日の楽しみとした人、ジョークが達者な人等々。私も諸先輩方の中に参加し、学ばせていただくこととなった。

教室に女子栄養大学生涯学習講師の古川知子先生を招いた。先生の教えと会のスタッフのフォローとともに男性達の料理教室は進められた。

和やかな笑い

『基礎から～』とあり、初め厳格な習い事になるのではと私は思っていた。

しかし、予想に反し現場は終始笑いの絶えない楽しい雰囲気。講義中にオヤジギャグやお世辞がとび、笑いを誘う。包丁の握り方やきり方が危うくハラハラしたり、教えられた手順をとばしたり、食器やボールを取りに行ったり来たり…。不器用さがかわいらしく見えるのか笑いがまた広がる。こちらはチームメイトが包丁を持ちながら持ち場を移動するので、すれ違いざまに思わずヒヤヒヤ…お互いの危なっかしさに苦笑いを交わしつつ、まるでドタバタコメディのワンシーンを切り取ったかのような会話や光景が出るたびに、そこかしこから笑いの声がどっとあがった。

「二人の力でこの量を食卓に並べるのは今は難しい。（妻は）よくできてるなと思う」

「せめて学んだことを生かし、一品だけでも手伝うことから始めたい」と参加者はどの人も不思議と前向き。

仕事ではないというのもあるのか、会社勤めの続く男性が持ちがちな重苦しい雰囲気は薄らぎ、どこか和やか。また「妻のため」という思いもあり、積極的に学ぼうという姿もそこにはあった。

しかし、それ以上に料理の工程を楽しみ、そしてさまざまな層の人たちが垣根を越え、年がいもなく楽しんでいる姿が私には不思議とうれしく、また憧れの姿勢として目に映った。

架け橋になれば

会のスタッフは、参加者の皆さんのおかげで有意義な時間を作り出すことができた。そして、少しでも市民の架け橋になればと思い取り組んでいきたいと述べた。

交流の場は市内には多い。お互いを見つめる良い刺激となるため中高年も十代、二十代の人たちにもぜひ足を運び参加してほしい。また、定年退職した人も怖がらずに来てほしいと思う。

編集後記

会場内で「料理男子」の話題になりましたが、私の場合は両親が共働きで不在だったため、いつの間にか覚えてしまったものです。でも長年やっている女性の手際の良さにはかないません。

また、いくつになっても両親が仲睦まじくしている姿を見るのはうれしく、どうあっても親を嫌いになれません。

ただ寄り添って隣に居てくれること。

手紙やメール、プレゼントを「送っておけばすむだろう」で済ませずに、クリスマスや誕生日会を開いてくれる。話さずとも一緒にご飯を食べてくれる。それだけでも実はうれしかったりします。

特に私は口下手なので父と居てもろくに話しませんが、ぼーっと隣に居てくれるだけでもほんの少し安心します。

（ところで、肝心の男の料理の味の感想はというと……続きはぜひ、ご家庭で）

◉企画・編集
ふじみ野市女性情報誌「燦」編集委員
等々力　敦